



写真集と写真展

～人と人の出会い、再会の冥利をいただいている～



会員 関谷 巖 (25期)

写真を趣味にして久しい。

京都、奈良を中心にして四季折々の風景を撮ってきた。

そんな視線の先に「仏教伝来」をテーマとして、アジアの仏教国を巡っていた。

平成12年からミャンマーの仏教風景を撮り、平成15年6月、写真集「遊行」を上梓して、記念にコンタックスサロン銀座でミャンマー写真展「遊行」を開催することができた。

この写真集が契機となり、修習時代の教官であった小瀬保郎弁護士から「刑事弁護の教官であった日野久三郎先生がビルマ戦線での従軍記を残しておられる」とのお話を伺った。

日野先生へ写真集をお贈りしたところ、先生から、ご自身が捕虜時代に描かれた数点の美人画を挿入した冊子「かくして生き残れりービルマを横断して1000軒」をいただいた。

日野先生がビルマ戦線で生死の境を歩かれていたとは？ 修習時代には一切口にされず自身の記憶の中に封印されてきたお話である。

大変なご苦勞をされて日本の土を踏まれたことに感動し、先生の人となりに触れさせていただいた瞬間であった。

先生からは、写真集に対し「60年前の戦乱の中のビルマを想起しました」との感想をいただいた。ミャンマーでは日常よく目にする仏教風景の写真の中にも「戦乱、戦時」の記憶をたどる糸口を見つけておられたのである。

修習終了30年、記念の年の出来事である。

平成17年4月、ご縁有って東京芝・増上寺のホールで写真展「遊行」を開催することができた。

会場に置いた地図を指で追いながら一点一点写真を確認するように見ておられる方があった。

「ミャンマー、ビルマに何か関係がありますか？」と声をかけた。

「はい、私の父が戦中にビルマに行ったまま帰らないのです。記録上は戦死とされましたが、遺骨、遺品など何もありません。いろいろ考えてもビルマに行く気になれ

ないのです。安全なのでしょうかね？」

何点かの写真を前にして

「安全ですよ。子供たちの笑顔にも感動しましたよ。是非、行かれたら如何でしょう？」

「そうですね、今も慰霊の旅の案内が来るのですが参加したことがないのですよ」

こんな会話を交わしお別れした。

修習終了35年となる本年4月、増上寺で4回目となる私の写真展を開催した。

開催初日、にこにこ顔で挨拶される、どこかでお目にかかった方だが、思い出せない。

「この3月に決心してビルマへ慰霊の旅に行ってみて来ました。暑かった!! 灼熱の地獄でしたが。3年前に、行かれたらと薦めてくれたお陰ですよ。ここで写真を見てなければ、自分の思い込みで、ビルマは怖い、危ないと勝手に決めてましたから」

「あっ!!!! 御尊父がビルマで……」

3年前を思い出す。

「これ見てください。慰霊祭をしたら、地元の人が協力してくれました。シタン河のほとりで、父の慰霊祭が無事にできました」

撮ってこられたスナップ写真を前に清々しい明るい表情でお話される。

シタン河???? この響きが脳裏に焼き付いて離れない。

シタン河はバゴーの郊外を流れる河だ。バゴーは、ビルマの豎琴のモデルとなった寢釈迦佛で有名な町で、写真を撮りに何度か立ち寄った。

何かあったな?とあって、日野先生の冊子をめくる。

あった!! 日野先生の冊子の中に、敗走の日本兵多数がバゴー平野を流れるシタン河にて犠牲となった状況について、シタン河渡河の体験者として記録されていた。日野先生は、平成17年8月、永眠され、冊子の内容についてお話を伺う機会を失ってしまった。

誠に残念なことである。

出会い、再会の冥利をいただいている。

*表紙裏に関谷会員撮影の写真を掲載しています。